

特別授業

「三国志・諸葛孔明の『生き様』を考える」

今年度の特別授業で私は、「三国志・諸葛孔明の生き様」を生徒達と追ってみることにした。教材「三国志」の「諸葛亮伝」を読みながら、関連するいくつかの資料を提示しながら、「三国志演義」で描かれている、鬼神のような孔明ではなく、歴史書に描かれている孔明の行動を追いつつ、その実像を考えたいというものである。次に紹介するのは、最後に生徒達に書かせた「孔明をどう考えるのか」というレポートである。簡潔にまとめた者、孔明の生涯をもうすこし自分なりに探究した者など多彩なレポートがあったが、その中の四点を紹介する。

(菅野正則)

諸葛孔明について

中三十二 吉田 瑛二

孔明は様々な面を持った人物であるので、一つずつテーマ分けして、それに関わる出来事を見ながら孔明という人物を解いていこうと思う。

・ 賢い人、世の中に精通した人

孔明は劉備に仕える事にしたのだが、劉備に仕える事にしたという事自体に既に孔明の計略が表れている。普通の人であれば、領土も持たない無名の集団である劉備達に仕える事などせず、安全である程度の身分も保証される曹操の下に馳せ参じるだろう。孔明がそうしなかったのは、二つ理由があって、一つ目は徐州での大虐殺で曹操の残虐性を知っていて、それを嫌ったということ、二つ目は小さな集団である劉備に、三顧の礼を尽くしてもらって用いられば、自分(や知識人達?)の優遇を確約してもらえろという目論みがあったからだ。これだけの事を考えるには、やはり社会に精通して、計略を巡らせる事が出来なければならない。

こういった孔明の賢く、社会に精通しているという面は、天下三分計、赤壁の戦いで巧みな外交、劉備死後の実質一人での蜀の統治などと、挙げればきりが無いほど史実に残っている。